

[原著論文：査読付]

〈戦後〉への違和
—梅崎春生「無名颱風」

高橋 啓太*

The “Discomfort” to Postwar: Haruo Umezaki’s “Mumei-taifū”

Keita TAKAHASHI*

Abstract

Haruo Umezaki published “Mumei-taifū” in 1950. This short story is based on the experience that Umezaki encountered a typhoon on the way home from Kagoshima where he greeted the end of the war as a soldier. Almost no one paid any attention to the story yet, but the story is worth discussing to focus on the period of 1950. Umezaki went into a slump in about 1950, and he wrote short stories which made a subject the “Discomfort”, a lack of a sense of reality or mental anxiety. The purpose of this paper is to examine “Mumei-taifū” as a text which expressed the “Discomfort” to postwar.

KEY WORDS : Haruo Umezaki, “Mumei-Taifū”, Demobilization

はじめに

本稿では、梅崎春生が『別冊文芸春秋』1950年8月号と10月号に連載した小説「無名颯風」を取り上げる¹。このテキストは、桜島基地で敗戦を迎えた梅崎が復員列車に乗った際、途中駅で台風の直撃を受けた体験を基にしている。物語の前半では、「私」の向かいの座席に座った「ミミズクに似た顔をした四十四五の老応召兵」の様子を見る「私」の心境が語られており、この部分は、梅崎が前年に発表した「生活」（『個性』1949.1）を踏襲している。

「無名颯風」を具体的に分析した研究は、管見の限り見当たらない。管邦男は、題名ともなっている「颯風」による実際の被害状況や梅崎の乗った復員列車のルート进行调查し、物語の中に梅崎による脚色が少なからず含まれていることを明らかにしているが²、作品分析にまでは立ち入っていない。管以外では、和田勉が『『生活』では、復員列車の中で世間の顔をとるもどして行く老兵の姿が描かれており、『無名颯風』では、復員途中に見舞われた台風の時のエピソードが描かれている³とまとめている程度である。

しかし、「無名颯風」は1950年という発表年を考えると、注目に値するテキストである。1950年頃に梅崎は「行き詰り」を自覚しており、梅崎研究の中でも作家活動の過渡期とされている。ただ、この時期に書かれた諸作では主人公の現実に対する〈違和〉が描かれ、その〈違和〉は晩年のテキストにまで継続して描かれていくことになる。

本稿の目的は、「無名颯風」の内容を掘り下げて分析し、戦後に対する〈違和〉が描かれたテキストとして定位することである。梅崎自身が「行き詰り」を感じていた1950年頃のテキストは、その後の梅崎の作家活動を踏まえると小さくない意義を持っていると考えられる。「無名颯風」はこの時期の梅崎作品の中では注目されてこなかったが、十分に検討に値するテキストであることを明らかにしたい。

1. 梅崎の「行き詰り」

梅崎は、敗戦から3年ほどの間に「桜島」（『素直』1946.9）、「日の果て」（『思索』1947.9）などの戦争小説、「蜆」（『文学会議』1947.12）、「飢えの季節」（『文壇』1948.1）など闇市や飢餓状況をモチーフにした短篇を発表し、第一次戦後派として文壇に登場した。しかし、梅崎はその後、創作活動に「行き詰り」を感じ始めた

と明かしている。

その後、だんだん私は書けなくなってきた。／行き詰ったと言ってもよろしい。／その行き詰りの原因の一半は、私の文体にもあった。自分の文体の重さが、私を書けなくした。／たとえば「日の果て」の文体は、文体のための文体と言ってもいいもので、その規格にあてはめて小説を書くためには、多少とも自己を歪めねばならぬ。／私は小説を書きながら、どうも自分は本当のことを書いていない、と感じるようになってきた。うそを書いている、デッチ上げをやっている、その意識が私の筆をさらに重くした。／昭和二四、二五年がその時期に当る。つまり私は、自分流に設定した「小説」というものの枠や形式に、しばられていたわけだ⁴。

梅崎研究の中でも、「昭和二四、二五年」の「行き詰り」は指摘されている。奥野健男は「食糧飢饉が解消されるころから、次第に彼は自己のテーマを託すべき地盤を失っていった。[中略]彼はこのごろまったくゆきづまったのだ」⁵と論じ、戸塚麻子は「極限状況下でのエゴイズムというテーマ自体が、時代の激動の中で既に古びてしまい、このことが一九五〇年頃の行き詰りの一要因となっていることを指摘したい」⁶と述べている。梅崎はその後、「です・ます」の口語体を用いた「山名の場合」（『新潮』1951.11）、「Sの背中」（『群像』1952.2）で新境地を開き、同様の文体を用いた「ボロ家の春秋」（『新潮』1954.8）で直木賞を受賞することになる。こうしたその後の活躍もあるため、「昭和二四、二五年」は梅崎の作家活動の過渡期とされている。

しかし、この時期の「偽卵」（『知識人』1949.1）、「因日」（『風雪』別冊、1949.4）、「黄色い日日」（『新潮』別冊、1949.5）には、晩年の「仮象」（『群像』1963.12）「記憶」（『群像』1962.7）、「遺作の「幻化」（『新潮』1965.6、8）と共通する現実感覚の失調や精神が主題的に描かれており、注目に値する⁷。

中でも「黄色い日日」では、主人公「彼」の現実感覚の失調は、倦怠感や食欲減退を伴った「いつものに似た生理的不安」と説明されている。「彼」はラジオで「東京裁判の実況放送」を聴き、判決を告げる「デス・バイ・ハンギング」という言葉が「ある重量と実質をふくんで」、「沢山の人を殺し、彼自身の内部のものを殺した兇暴な嵐の、ひとつの帰結点の位置で発音されていた」と実感する一方、「（いつもおれは実のな

いへなへなした言葉ばかりを、言ったり書いたりしている)」と自嘲する⁸。国際司法の場でA級戦犯の罪が確定するという、日本の戦争犯罪をめぐる歴史的な「帰結」を迎えても、「彼」自身は戦後の再出発を遂げることができないのである。

さほど研究されていない1950年頃の梅崎のテキストに注目することは、その後の作家活動を考えるうえでも必要な作業である。復員途中の梅崎自身の体験を基にした「無名颯風」は、「黄色い日日」などと同列に語ることはできないが、同時期の「偽卵」「因日」「黄色い日日」などとは異なった形で、現実に対する〈違和〉が描かれている。梅崎自らが「行き詰り」の時期とした1950年に「無名颯風」を発表した意味は、決して小さくない。

2. 戦中と戦後の間

先述したように、「無名颯風」の前半部分は「生活」を踏襲しているが、最初の「一」「二」は「生活」にはない「私」の語りで構成されている。冒頭は「昭和二十年八月下旬、かなりの風速をもった颯風が、九州南西部の一带を通り抜けた。終戦後、とは言っても、まだ数日を経たばかりだから、しゃれた名前のつきようもない、無名の颯風である」という一文から始まっており、題名通り「颯風」の存在を強調している。さらに、「颯風」の強さについて「かなりの風速、と、さきを書いたけれど、控え目に記憶を探ってみても、やはりそれはかなり以上の風速だったような気がする」と、「昭和六年の夏北九州をおそった、風速四十五米の颯風」と比較し、「身に迫る兇暴さにおいて、それと同程度の、ある瞬間にはそれ以上のものを、この無名颯風は具えていたようだ」と説明している。また、「私」が後日知った情報を差し挟みながら復員列車に乗った当時のことを振り返るとい語りのスタイルも、「生活」とは明らかに異なっている。

「無名颯風」の中で「生活」を踏襲した内容となっているのは、「三」からである。「生活」の冒頭は、「列車が都城を過ぎる頃から、空模様はあやしく乱れ始めた」という一文から始まる。列車内は「私とおなじく今日桜島突撃隊を解員された兵員ばかり」で、「私の前の座席には木菟みみずくに似た顔の老兵がこしかけていた」。「無名颯風」の「三」は、「都城を過ぎる頃から、列車をおおう空模様が、あやしく乱れ始めてきたのである」という「生活」の冒頭とほぼ同じ一文から始まっている。「鹿児島駅いらいみみずくに似た顔をした

四十四五の老応召兵」が「私」の向かいの座席に座っているという場面設定も「生活」と同じである。「この老兵は鹿児島駅ふきんの海軍基地で、私と同じ部屋にい」て、その時から「老兵」の「赤く濁った大きな眼」が「昼間に大きく開いていても視力を喪失しているあのミミズクの眼に、そっくりであった」と感じている。

そして、「私」は「私たち三十歳前後の連中」とは違う「老兵」たち四十代の補充兵の傾向について説明し始める。四十代の補充兵は一九四五年になってから招集されており、その前年に招集された「私」は、「私の後から次々入ってくる連中の様子を、つぶさに眺めてきた」。「彼等」は「自尊心だと好奇心みなぎだとか、軍隊内では通用しそうな属性を、表情に漲らせてやってくる」が、すぐに変貌する。

ところが一箇月もたたないうちに、息子ほどの年頃の兵長に、ようしゃなく尻を打たれたり、甲板掃除で追い廻されたり、だんだん自分が人間以下に取りあつかわれていることが、身に沁みて判ってくる頃から、彼等の世間なみの自尊心や好奇心や、その他もろもろの属性は、しだいに消えてなくなってゆく。喜怒哀楽が表情に出てこなくなる。

「私」は「彼等はいろんな抵抗を避けるために、概していかなる擬態をも採用する」と語るが、「ここに仮に、彼等と書いた。彼等ではない。もちろん私ならびに私たちである」と即座に自分の言葉を訂正し、「私たち三十歳前後の連中」も「擬態」を用いていたと付言したうえで、「ただ三十前後の私たちが、長いことかかっても、完全には化け終せなかったところを、此の年招集された四十前後は、極めて巧妙に、しかも頑固になしとげたようである」と「老兵」たちを区別する。梅崎は敗戦直後から、海軍への応召経験の過酷さを自作に取り入れている。「桜島」では、新兵が「私」の上官である吉良兵曹長から私刑を受けている場面を描き、また、「若い作家の弁」(『新文芸』1947.8)というエッセイでは、「三十代四十代の老兵が続々引っぱられて、前述の如く年はとっていても若い兵隊が、二十歳前後の若者から叱咤されたり、棒で尻をたたかれたり、食卓当番や掃除当番に追い廻されたりしたのである」⁹と軍隊生活を振り返っている。

ただし、「無名颯風」の「私」が見極めようとしているのは私刑のはびこる軍隊という組織の問題ではなく、過酷な軍隊経験を経て復員しようとしている「老兵」たちの様子である。「今この座席から見渡せる幾

多の老兵ら」は、「部隊をはなれ汽車に乗ったというだけで、もはや娑婆の風情をとりもどし始め」、[私の前にいる老兵も、部隊にいたころは、なにか得体の知れぬ痴鈍な感じだったのが、今ははっきり解放された喜びを、身のこなしにあらわしている]。復員列車は「私」や「老兵」を日常へと運ぶ移動手段であるばかりでなく、戦中と戦後の間、軍隊と日常との間をつなぐ空間そのものであり、その中で「老兵」たちの表情や言動が変化していくのである。

一方、「私」は「老兵」たちとは対照的に、復員を「解放」と感じるができない。車窓から「線路沿いのせまい道を、カンカン帽をかぶった中年の男があるいて行く」のを見ていると、突風で帽子が飛ばされ、「男は腰をかかめてそれを追っかける」。「私」には、「浴衣にカンカン帽をかぶった姿。そんな服装が暗示する生活」が「自分にふたたび始まるということが、なぜか先ず肌合わぬ感じとして」迫ってくる。

——この汽車で東京に戻ってくる。着物を着て、畳の上で飯をくう。背広をきて、毎日役所にかよう。夕夕刊を買って、省線に戻ってくる。時には風で帽子を吹き飛ばされたり、乏しい銭で安酒を飲んでみたり、そんな生活の枝葉。(しかしそんな生活をこそ、この二年近くの間、私はひそかに渴望しつづけていた!) / それなのに今となって、その渴望は渴望の形のまま、へんに不透明な翳^{かげ}をひき始めている。ごく微かな、ぼんやりした侘しい翳。それはいきなり気圧の低い世界に立たされたような、生理的に不安定な感じを伴っている。

「私」は、「今朝部隊の門を出るとき」には「昂揚された自由感」を覚えていたが、「何時の間にか、なにか質の違ったものとすり替えられている」と感じている。それは具体的な理由のある不安ではなく、「生理的に不安定な感じ」である。

ここまでの「生活」と重なる内容である。この後、「無名颯風」では「颯風」接近のため復員列車が高鍋駅で停車する。「私」たち復員兵も被害を受け、「ミミズクに似た顔をした」老兵は、倒壊した駅舎の下敷きになり死亡する。「私」の「生理的に不安定な感じ」は、物語の主題ではない。

だが、前節で触れたように、梅崎はこうした〈違和〉を同時期の「黄色い日日」でも描いていた。無論、「無名颯風」が「黄色い日日」と連続的に捉えられる関係にあるわけではないが、1950年頃の梅崎は、これか

ら戻ろうとする戦後の生活、あるいは戦後数年を経て日常生活に〈違和〉を感じている人物を主人公にしたテキストを書いているのである。

3. 「老兵」との関係性の変化

「無名颯風」では、「生活」を踏襲して復員後の生活に対する「私」の〈違和〉が語られていた。勝又浩はこの点に注目し、「この復員列車道中の幾シーンかが、梅崎春生が事あるごとに振り返っていた、いわば原点の一つであったことを私は思わざるを得ない」¹⁰と述べている。勝又の指摘は示唆的であるが、「無名颯風」は「生活」を踏襲しているだけでなく、同じ場面における加筆修正によって、「私」の〈違和〉をより強調している。

車窓からの風景を見て「生理的に不安定な感じ」を覚えた後、「私」は列車が目的地まで問題なく動くのか気にする「老兵」に対し、「そんな早く帰り着いても、しかたがないじゃないか」と返答している。「生活」でも「一日や二日延びたって大したことはあるまい。そんなに早く帰り着きたい訳じゃないだろう」と返答しており、内容的に違いはない。しかし、その後の「老兵」に対する反応には小さくない変化が見られる。

「私どもは一刻も早く帰りたいです」 / [前略] 部隊に居たときのように、命令を受けてもそれを理解出来ない風であったり、寝ているところに消毒液をかけたりするような、けたを外した動作や振舞いは、まこと私が予想したように擬態であるらしい。[中略] しかしその事は私とは何の関係もなく、また興味もない。ないにも拘わらず、私は此の老兵の顔を見ていると、してやられたという感じが強かった。 / 「そんなに帰りたいのかね。家では何をやって居るんだね」(「生活」)

「私どもは、一刻も早く、帰りたいです」 / はっきりした口調であった。私はすこしひるんだ。部隊にいたときのように、命令を受けても理解できない風であったり、寝ている人間に消毒液をかけたり、そんなけたを外した動作や感情は、もうこの男にはない。あれはやはり擬態だったのだ、と思う。[中略] しかしそれはどちらでもいい。もはや私とは関係ないことだし、それほど興味もない。ないにも拘わらず、この老兵の顔を見ていると、私はしてやられたという感じが強かった。 / 私から眼をそらさず、

老兵はまた追っかけるように、口をひらいた。／「あなたさんはそれほど、帰りたくないのですか」／「いや」私はたじろいだ。すぐ気を立てなおして、こんどは逆に相手をたしかめるように「そんなに帰りたいたいものかな。家では何をやっていたんだね」（「無名颯風」、傍線筆者）

「生活」では、「老兵」の軍隊生活での「擬態」と「一刻も早く帰りたい」という率直な言葉が対照されているが、それはあくまでも「私とは何の関係もな」ものである。「私」は「老兵」を観察する主体として、観察される「老兵」を客体化する位置にある。しかし、「無名颯風」において、「私」は「老兵」を観察する主体としての位置を確保できない。「私」は「私から眼をそらさ」ない「老兵」に見つめられ、その言葉に「ひる」み、「たじろ」ぐ。つまり、「私」は「老兵」に対して受動的な位置に置かれるのである。「老兵」に家業を尋ねる際にも、「私」は「気を立てなお」さなければならない。「無名颯風」の前半が「生活」を踏襲した内容であることは間違いないが、「私」が「老兵」から作用を受ける立場に置かれ、復員後の生活に対する二人の認識の対照性がより際立つことになるという変化が見られる。

4. 「男」との遭遇

「駅のすぐ先の鉄橋が、増水のため落ちて、不通になって」しまった高鍋駅で復員列車が停まり、「颯風」の通過した翌日に再出発するまでを描いた「無名颯風」の後半でも、戦後への（違和）が語られることになる。復員兵たちは駅舎で待機していたが、「建物の振動や軋り音の感じから、この駅舎がひよわな細っこい建て方をしてあることが、皮膚にじかに伝わってくる」。「私」は「風雨に安全な場所をもとめて」高鍋の街に出て行く人々に続いて駅舎を離れ、「土間がだだっぴろい、農家造りみたいな家屋」に転がり込む。そこは空き家であったが、「中二階みみたいな、狭い板じきの部屋」の中心を立ち貫く「太い柱」の陰に「男」が一人うずくまっており、「私」を威嚇する。言葉を交わすうちに「男」の「敵意はほとんど消え」るが、「まだ隔意の風情が頑強にのこっている」。「とにかくその男は、すこしずつ変であった」。

「男」は「お前は、テンゾクか」と聞くが、「なにか賊みみたいな意味かと、私は理解しかね」、「男の説明で、やっと、転属だということが判る」。「この言葉は海軍

では使わないから、耳慣れ」ず、「この男は陸軍の兵隊だ、と私は推知する」。また、「男」はよほどの空腹であるらしく、「私」の衣囊に入っていた食糧を食るように食べ続ける。「親しみをこめた感じ」で「ずいぶん、食うじゃないか、お前」と「私」が言うと、「ぎょっとしたように、男は柱から身を引」き、「ゴボウ剣を搦」み「食って、悪いのか」と「ひどく険しい声」で言い放つ。さらに、「おめえ。どういふつもりで、ここへ来たんだ」「おめえは、いったい、誰だ。誰だよ」と苛立つ様子で「私」に聞いてくる。「私」は「この男は、何かをおそれている」ために「極度に過敏になっている」と気づく。やがて、「男」は「おれは、逃げたんだ。逃げてきたんだ」と告白する。この脱走兵は日本の敗戦を知らずにいたため、「テンゾク」という陸軍の用語を用い、突然家屋に転がり込んできた「私」を警戒していたのであった。

また、いまだ戦中を生きていた「男」だけでなく、「私」もまだ兵士であった。「男」が脱走を告白する前に、二人は倒壊しそうな空き家から急いで脱出している。脱出直後、「私」は「衣囊をあの上二階に遺棄してきたことが、初めて意識にのぼ」り、「（これは大変だ!）」と「兵隊の本能がうごい」たが、「次の瞬間、自分が解員された身だと気がつく」と、弛緩した笑いが私の咽喉にこみ上げてきた。「兵隊の本能」が「私」の身体に刻まれているのである。

その後、「私」は「男」に敗戦の事実を教えようとする。しかし、「彼の自由を告げるというのに、私の気持ははなはだしく残酷にな」り、「善意というより、はっきりした悪意」から「だって、お前、もう戦争は、すっかり済んだんだぜ」と告げる。軍の追跡を恐れて「私」のことも警戒していた「男」が敗戦を知ることは、「残酷」ではあるまい。なぜ、「私」は「男」に事実を伝えることを「残酷」であると思うのであろうか。敗戦の事実を知り、「男」が「死にかかった章魚のように、無抵抗に壁によりかかったままでいるらしい」のを見る「私」の嗜虐性は、いささか屈折している。

（ざまあみろ）／私も黙りこくったまま、ふとそう思ってみる。すると胸のなかの残酷な主調が、急に憐憫にとってかわるのを自覚する。この男にたいする憐憫ではない。もっと別の、なにものに対してとも知れぬ、叫び出したくなるような焦燥と憐憫。——そして一時に発してくる、深い疲労と倦怠。

「私」は「男」に事実を告げて「焦燥と憐憫」を感じ、

「深い疲労と倦怠」を覚える。復員後の日常生活に「肌合わぬ感じ」「生理的に不安定な感じ」を覚えたように、この場面でも、戦後は解放感に満ちたものとしては認識されていない。敗戦を知らない「男」との対峙を通して、再び戦後への〈違和〉が語られるのである。

おわりに

「無名颯風」は、梅崎が復員する途中で「颯風」に遭った経験を脚色して作品化したテキストであるという位置づけにとどまっており、梅崎の思想性との関連や物語の細部が具体的に論じられることはなかった。しかし、本稿で論じてきたように、「生活」を踏襲した内容と「無名颯風」独自の場面設定やエピソードを通して、戦後への〈違和〉が語られていた。

1950年前後における梅崎の〈違和〉は、「偽卵」「因日」「黄色い日日」以外のテキストにおいてはほとんど指摘されてこなかったが、必ずしも主題として前景化しない形で戦後への〈違和〉を物語に潜ませている「無名颯風」は、この時期の梅崎を研究するに際して示唆に富むテキストである。

注

- 1 本稿における「無名颯風」「生活」の引用は、梅崎（1986）に拠り、ルビ・傍点は適宜省略した。
- 2 管邦男（1984）：読む 梅崎春生「無名颯風」。日本文学, 30（1）。
- 3 和田勉（1986）：梅崎春生の文学。桜楓社, p.171。
- 4 梅崎春生（1955）：私の創作体験。岩波講座『文学の創造と鑑賞』4, 岩波書店。梅崎（1985b), p.55。
- 5 奥野健男（1956）：梅崎春生論——「おかしさの文学」, 現代作家論, 近代生活社。常住（1988), p.67。
- 6 戸塚麻子（2000）：ニヒリズム超克の試みとその挫折（一）——梅崎春生の一九五〇年前後の私小説的作品群, 及び可能性としての『山名の場合——』。日本文学試要, (61), 戸塚（2009), p.104。
- 7 近年では木村（2004）, 渡部（2016）がこれらのテキストを論じている。
- 8 「黄色い日日」の引用は、梅崎（1985a）に拠った。
- 9 梅崎（1985b), p.104。
- 10 勝又浩（1976）：飢えと旅人——梅崎春生論。群像, 31（7）, 208。

参考・引用文献

- 1) 梅崎春生（1985a）：梅崎春生全集2。沖積舎。
- 2) 梅崎春生（1985b）：梅崎春生全集7。沖積舎。
- 3) 梅崎春生（1986）：梅崎春生全集1。沖積舎。
- 4) 常住郷太郎編（1988）：梅崎春生全集 別巻。沖積舎。
- 5) 戸塚麻子（2009）：戦後派作家 梅崎春生。論創社。
- 6) 木村功（2004）：メランコリーの光学——梅崎春生における鬱病の病理とその言語表象。叙説Ⅱ, (8)。
- 7) 渡部裕太（2016）：境界線の構図——梅崎春生「因日」「偽卵」「黄色い日日」論。立教大学日本文学, (116)。

Received date 2017年5月24日

Accepted date 2017年6月30日